

においの不思議 児童実験で迫る

松山でWS

においを感じる仕組みを



理化学研究所の武石明佳さん（中央）に教わりながら、線虫の動きを確認する児童＝28日午後、松山市大手町1丁目

子どもたちが学ぶワークショップ（WS）が28日、松山市大手町1丁目の愛媛新聞社であった。県内の小学生35人が、瓶の中を嗅ぎ分ける実験や線虫の観察に取り組み、嗅覚の不思議に迫った。第36回「愛媛新聞読書感

想文コンクール」に合わせ同社が主催（太陽石油特別協賛）し、理化学研究所脳神経科学研究センター（埼玉県和光市）の武石明佳さん（40）が講師を務めた。武石さんは、鼻の奥にある嗅神経細胞の先端にさまざまな形状の受容体があり、そこで多様なにおいを感じる仕組みを説明した。

続いて参加者は白衣や手袋を着用して実験に臨んだ。体長約1ミリの線虫が入ったシャーレにバナナのようなおいがする液体を注入すると、においを感じ取った線虫が集まってくることを確認。4本の異なるにおいの入った小瓶の中身をかぎ当てる実験では、同じ物質でもにおいが薄いとジャスミンのようにかぐわしい香りがするのにな、濃いとふん尿のように臭く感じられることに驚いていた。

潮見小5年の渡部日咲子さん（11）は「線虫がにおいのある所に集まるのが不思議。小瓶のにおいを当てる実験はわくわくした」と楽しんだ様子だった。

（杉本賢司）